

震災より4年半経った被災地から考えること

東日本大震災から4年半が経った。私は震災から3年目を迎えようとする2014年の2月に、初めて被災地を訪れた。その時訪れた宮城県山元町には今でも定期的に足を運びボランティア活動を行っているが、今回のFSのフィールドである石巻は、被災地を巡った際に通過したことを除けば初めての訪問だった。

FSの4泊5日の工程を経て、石巻で過ごし地元の人と話すうちにいくつか感じたことがある。1つ目は、ひとくくりに「被災地」と言っても、当時の被害の状況も違えば復興の進み具合も、今求められていることも違うということだ。このことはFSに参加する以前から言葉では理解しているつもりだったが、現地に足を運んで自分の目で見・聞きして初めて実感することが出来た。私が普段活動している山元町は大きな津波被害を受けたが、主に防潮堤を新設するのと市街地を内陸に移すことで復興計画が進んでいる。一方、石巻では集団高台移転の問題がある。私たちがFSで4日間滞在した石巻市北上町は漁業を中心産業としている地域であり、震災前は当然港の近くに集落があった。そんな彼らが震災により仮設での生活を余儀なくされ、また新たに集団高台移転、さらに仮設によっては高台移転の前に復興公営住宅建設のため仮設から仮設への引っ越しを求められているところもある。

「仮設とはいえ、それなりに自分の生活ができていたのに。」「震災当時は（仮設の中で）よそ者だった自分たちも仲良くなれたのに、（引っ越しすると）隣近所のことともまたいくらか気を遣うことになる」という声には、人々の復興のスタートとも言える家の再建が遅れている問題を再認識するきっかけとなった。

感じたことの2つ目は、今でも私たちにできることはたくさんあるということだ。震災から時が経つにつれて現地で活動を行うボランティアの数は減っている。4年半も経つと人々の関心は薄れ、それぞれが復興のイメージを持ち「もう被災地ボランティアは必要ない」と思う人もいるだろう。私自身、初めて被災地を訪れたのは既に3年が経とうとしていた時であり、ボランティアに参加するまでは「今更自分にできることはあるのだろうか」「今行くのはただの自己満足ではないか」などと考えていた。しかし、実際に現地を訪れて感じるのは「私たちが思い描く復興にはまだ程遠い」ということ、「何年目」というのは一つの通過点であり、その日を境に何か好転するようなことはない」ということ、そして「今でも私たちにできることはたくさんある」ということである。

「まだやることがあるの?」という言葉は被災地ボランティアに行く際によくかけられる言葉だ。被災地ボランティアというと瓦礫の撤去や側溝掃除などを思い浮かべる人が多く、実際それらの仕事は震災直後には多いのだが、ボランティアの活動内容は現地のニーズにより変化している。最近、被災地では防波堤の建設やかさ上げ工事など、ハード面の工事が行われている。石巻でも復興祈念公園や復興公営住宅の建設が進み、工事車両やトラックをいくつも見かけた。復興に向けた計画は着実に進んでおり被災地の様相は日々変

わっていくが、ボランティアは今でも多く必要とされている。復旧から復興へと動き出している時だからこそ、あらゆる所で人手不足が問題になっているのだ。たとえば、私たちがFSでお世話になった北上町は震災前から漁業が盛んで、今少しずつ再建しているところである。ところが震災以降北上の人口は減り、「これから」という時に働き手が足りない。FSのプログラムのうち2日目・3日目の漁業支援を受け入れてくださったSさんは、「(復興は)今からが大変」なのだとおっしゃっていた。4年半ずっと仮設で生活してきた人たちがようやく自分の家や公営住宅に移れるようになり、それぞれが新しく生活をはじめるところから、本当の復興のスタートなのだという。

私たちがボランティアに行くことは、小さいことばかりである。一度行って一生懸命に働いても、全体で捉えれば復興の小さな小さな一歩のほんの手助けにしかなっていないと思えるようなこともある。しかし、そのような小さいことを継続していくことが大切であり、小さいからこそ私たちにでも出来ると言える。

FSの期間中仮設住民の方とお話しする機会があったが、「こうして若い人が来てくれるだけで嬉しい」という言葉を何度もかけていただいた。人口が流出し若い人が減っているのは被災地に限ったことではなく、今回北上町での活動を通して地方と都市との距離、そして震災とその後の復興の遅れによって地域の問題が深刻化していることを感じた。

一度震災の被害を受けた地域はいつまでも「被災地」でいるわけではない。私は震災をきっかけにして北上という地域と関りができ、そこに暮らす人々を知り、地域が抱える問題を考えるようになった。そして、復興が進まず未だに自分の家さえ手にすることが出来ない仮設住民の生活や被災各地の現状を、彼らの声を直接聞き、自分がすべきことを考える必要があると考える。被災地を遠く感じている人がそれらのことを考えるきっかけづくりをしながら、これからも北上をはじめとして東北に足を運び復興のその後に続く関係を築いていきたい。